

原爆文学研究会報

第六五号

原爆文学研究会 二〇二二年三月

ウクライナのこと

長野秀樹

ウクライナのことを考えながら、『放射線災害と向き合っ
て―福島に生きる医療者からのメッセージ』（福島県立医科大学
附属病院被ばく医療班編、ライフサイエンス出版、二〇一三年
五月）を書棚からだしました。第三章「原爆とチェルノブイリ
原発事故から分かっていること」（熊谷敦史）で、チェルノブ
イリのことを確認したかったからです。チェルノブイリの原発
事故後の施設は侵略後、ロシア軍がいち早く管理下に置いたと
いう報道がなされています。

チェルノブイリ原子力発電所四号機で水蒸気爆発と水素爆
発が起きたのが一九八六年四月二六日。同原発のあるプリピャ
チの住人四万九千人と半径三〇キロ以内の住民一三万五千人
が避難を余儀なくされたといえます。被害はウクライナにとど
まらず、東ヨーロッパ全体に及び、隣接するベラルーシ国内に
も多大の被害が生じたことは当然です。ロシアの侵略にあたっ
て、ベラルーシ経由でロシア軍がウクライナに侵攻しているこ
とを考えれば、国境を越えた放射線の被害者であった人々が、
背中合わせに再び被害者になっていることが、なんともやりき
れませんか。同書によれば、日本からの支援は広島大学、長崎大
学を中心にベラルーシにもウクライナにも行なわれています。
これもまた、報道に頼ることになりますが、一九九一年のソ
ビエト崩壊時にウクライナには一八〇〇発以上の核弾頭が存

在し、一九九四年の「ブダペスト覚書」にアメリカやロシアも
署名し、核兵器をロシアに引き渡すことで、署名国によって同
国の安全保障が守られることになったということです。ソ連崩
壊時に最も危惧された核兵器の拡散を防いだことで、賞賛され
るべきはずが、結果的に核保有国ロシアによる侵略につながっ
たことは、これもまたなんともやりきれないことです。もちろ
ん、「やりきれない」などというだけでは何の力にもなり得な
いことは肝に銘じています。

本「会報」の第四号（二〇〇二年一〇月）、第六号（二〇〇
三年五月）ではインド・パキスタンによる核開発の問題が取り
上げられ（中野和典）、北朝鮮の核開発と「瀬戸際外交」とい
う言葉も見えます。二〇年という時間が経過しても、核兵器を
めぐる世界の政治は、変わっていない、そう実感させられてし
まいますが、その時間の中を私たちは研究会を続けてきたとい
うことでもあります。福島大学で研究会を開催したのは、二〇
一三年四月、第四一回の研究会でした。チェルノブイリと福島
を結ぶ視点は全国的に共有されていたと思います。熊谷敦史さ
んも参加されたことを記憶しています。

また、直接的にチェルノブイリと結ぶ内容として、第五二回
研究会（二〇一七年五月）の一日目は、原爆の凶丸木美術館と
共催で、本橋成一監督「ナー ज्याの村」と「ベラルーシ再訪2
017」の上映とトークイベントが開かれました。美しい村々
と無人の村の映像を覚えていきます。

第六五回 原爆文学研究会報告

二〇二二年十二月二十五日（土）第六五回研究会を開催しました。本研究会でも新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、しばらくオンラインでの開催が続いていましたが、第一期最後の研究会となる第六五回は対面と遠隔のハイブリッド形式を採用しました。研究会はワークショップ「一九八〇年代の雑誌にみる反原発思想」と座談会「原爆文学研究会の二〇〇年を振り返る」の二本立てで行われました。

前半のワークショップは名古屋大学の会場からオンラインで同時中継で行われました。まず高畑早希さんの報告「一九八〇年代までの児童文学誌にみる「反原発」言説の展開と、たつみや章『夜の神話』の登場」、次に久野桜希子さんの報告「『宝島』における反原発思想の展開」、最後に加島正浩さんから「運動体としての野草社―『80年代』・『自然生活』の分析を中心に―」の報告がなされました。一九八〇年代における反原発思想を当時刊行されていた雑誌から紐解こうとする試みに、会場からは同時代を生きていた参加者からの質問やコメントが盛んになされました。

後半の座談会は対面会場である福岡大学文系センター棟十五階第五会議室で行われ、オンラインで同時中継がされました。川口隆行さん、坂口博さん、高野吾朗さん、中野和典さん、長野秀樹さん、畑中佳恵さんが登壇し、第一期原爆文学研究会について振り返りをしてもらいました。座談会は登壇者の発言だけにとどまらず、対面会場とオンラインで集まった参加者にもマイクが渡される形をとり、会のこれまでを振り返るだけでなく、機関誌の編集発行や研究そのもののあり方にまで多岐に渡り意見が交わされました。会の活動が二十年続いていく中で会



員の生活や立場も変化していったこと、それでも本研究会に関わり続けた人達の生き様を垣間見せるような座談会となりました。

原爆文学研究会は二〇二二年三月をもって第一期の活動を終了するため、この第六五回が第一期最後の研究会となりました。当日は参加者の皆様の協力により、無事に終えることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

◇ワークショップ

一九八〇年代の雑誌にみる反原発思想

◇報告1

一九八〇年代までの児童文学誌にみる「反原発」言説の展開と、たつみや章『夜の神話』の登場

高畑 早希

筆者の当初の関心は、八〇年代の日本の児童文学誌における「反・原発」言説の展開にあった。チェルノブイリ原子力発電所の大事故を受けて、日本でも原発を扱った作品が現れはじめたことは、沢崎友美が既に指摘している（「原発問題に挑む児童文学から〈物語の力〉を探る―たつみや章『夜の神話』を

中心に——」『児童文学研究』第四五号、二〇一二年）が、批評誌的品格を有した『日本児童文学』が、それらの作品へどのように応答したかについてはこれまで不明であったためだ。

しかし、調査の結果、『日本児童文学』では原子爆弾や核ミサイルなどに対する「反・核兵器」の言説は数多く見られるものの、「反・原発」についての言及はほぼ見られなかった。そのため、報告の焦点を「反・核兵器」と「反・原発」言説の（すれ違い）に置き、誌面で展開されたそれぞれの性格について検討を行った。

八〇年代の「反・核兵器」言説で目につくのは、まず、「特集：作品・近未来戦への警告」（一九八一年十二月号）である。この特集は、米ソの核戦争を題材とした映画『FUTURE WAR・198X』の制作中止を求める抗議活動（映画の内容が「核兵器賛美」であるとして、東映の労組や母親らの団体が起こした）の一環として編まれた。またさらに、この時期には、レイモンド・ブリッグズの絵本『風が吹くとき』への注目も見られる。例えば、評論家の長谷川潮は、核戦争時に「お役所のパンフレット」通りに行動して死に到る無知で善良な夫婦を描いた本作について、「防護して生き残るなどということは国家が国民に押しつけた幻想に過ぎないこと」を鋭く明らかにしたと高く評価している（一九八四年八月号）。

上記の特集は、過去の戦争を語り継ぐだけでなく、近未来戦を語るための「有効な創造」を模索しようとする当時としては意欲的な試みであったが、『風が吹くとき』と同様に、核戦争による終末の恐怖を強調して終える作品が多い点については、高木仁三郎が『核時代を生きる』（講談社、一九八三年）で指摘した類いの限界があるのではないかと指摘した。（ただし、『風が吹くとき』の評価については、当時のイギリス政府のイ

デオロギーへの抵抗の文脈を踏まえる必要を指摘して頂いた。（詳しくは高山智樹「Protest and Survival」——イギリス非核武装運動と「When the Wind Blows」』『原爆文学研究会報』第四七号。）

最後に、「反・原発」の作品については、大変不十分であるが、芝田勝茂『夜の子どもたち』（福音館書店、一九八五年）とたつみや章『夜の神話』（講談社、一九九三年）を取り上げた。前者については、当時、作中の登校拒否の問題についてはクローズアップされたが、原発と核廃棄物の貯蔵所については取り上げられなかったこと。後者については、少年が神々と協力して原発事故に立ち向かうというスピリチュアルな要素が、批評のしづらさを招いた可能性を指摘した。

◇ 報告2

『宝島』における反原発思想の展開

久野桜希子

本発表では、一九八〇年代の若者による反原発言説の中で『宝島』が果たした役割について明らかにすることを目的とした。

まずは『宝島』の反原発言説の特徴を明らかにするため、一九八八年頃の誌面において反原発がどのような方法で実践されていたのかを分析した。その結果、「自宅闘争」と「趣味との接続」という二点の特徴を見出した。自宅という最も個人的な場所から、自分のやりたい方法で行動するという「自宅闘争」の方法は、「運動」や「連帯」に拒否感を示す若者にとって受

け入れやすいものであった。「趣味との接続」という観点については、特にファッションに注目して分析した。『宝島』では反原発のメッセージを込めたオリジナルの服やバッジを製作・販売し、それらを身に付けて参加するロックイベントを開催することにより、反原発と音楽とファッションを結びつけた場の創出を行っていた。

次に、同時代の他の若者雑誌との比較を行った。ロック雑誌という共通性を有する『ミュージック・マガジン』との比較では、正統なロック批評誌として、問題提起のみに留めた『ミュージック・マガジン』と、読者の実践の場を構築してみせた『宝島』の間で、読者へ与える影響が大きく異なるものとなったことを明らかにした。

さらに、同時代に『宝島』周辺とは別の文化を形成していた若者たちによる反原発言論を見るため、漫画情報誌の『コミックボックス』を分析した。『コミックボックス』では、反原発と漫画を接続させた実践の場を構築していくような動きには至らず、読者の多くは原発問題を取り上げるといふ雑誌の姿勢を称賛し応援するに留まっていたことを指摘した。

質疑応答を通して、本発表で明らかになった『宝島』の反原発言論の同時代的な功績が、その後の運動、特に福島原発事故以後にどのように繋がっているのかについて、考えを深めていく必要があると感じた。『宝島』で中心的に活動していた人物らがその後どのように行動したのか、また『宝島』の実践がサウンドデモ等の在り方に影響をもたらした点はあるのか、といったことを明らかにできれば、今日的な運動の在り方と接続した研究になるだろう。これは今後の課題としたい。当日ご意見をいただいた方々に感謝申し上げます。

◇ 報告3

運動体としての野草社

— 『80年代』・『自然生活』の分析を中心に—

加島正浩

本報告は、野草社が一九八〇年代に刊行した『80年代』と、その後継誌である『自然生活』を扱った。従来の先行研究は、たとえば桂秀実が、『80年代』の刊行を中心とした野草社の活動を、同時代に隆盛していたニューエイジやコミュニケーション主義、エコロジーの色彩が濃い運動誌と位置づけたり、安藤丈将が反原発運動をはじめとした実際の運動のなかで野草社の刊行物が実践的に用いられたことを明らかにしたりしている。もちろん野草社の刊行物が、同時代の運動のなかで果たした役割を明らかにした安藤の研究は重要なものではある。しかし、現在の視点から『80年代』を読み返すとき、誌面でも批判されているように、都市住民のロマンやファッションに過ぎない記事も多くあり、『80年代』もまた「商品」として消費されていた側面があることも否めず、桂が指摘するような同時代のニューエイジなどの影響を強く受けた部分を再評価することは難しいように思われる。

そこで本報告では、これまで『80年代』を分析する際には、ほとんど俎上に乗せられてこなかった中尾ハジメと、アイリィン・スミスの仕事に着眼した。中尾ハジメは、スリーマイル島の原発「事故」以後、現地での聞き取り調査を行っており、野草社から『スリーマイル島』（一九八一年九月）を刊行し、『80年代』でもスリーマイル島の記事を寄稿している。また、その

いくつかはスミスとの共作であり、スミスの名で出た寄稿記事でも中尾が取材に同伴している様子がみえる。

聞き取り調査では、原発「事故」以後に力を持つのは、科学の言葉であり、現地の住民の言葉は、「事故」以後を語る現地の住民の言葉は、心配を示す「心理的」な言葉として片づけられ、科学の言葉が「事実」を示す「体制」の言葉として、「事故」以後も以前と変わらぬように流通する様子が示される。そこから科学の言葉は、原発「事故」以後の「現実」を直接に捉えるものではなく、原発「事故」以前に組み立てられた言葉そのものを「事故」以後の風景にあてはめ、瞬時に答えを出すものであることが明らかにされる。中尾とスミスの仕事は、そのような科学の言葉に抵抗するために、専門家でない民衆が語る「事故」以後の言葉を聞き取り、科学の言葉のなかに組み込む（科学の言葉で説明する）試みを行ったといえる。しかし民衆が体験を理解し、言葉とするには時間が必要であるため、完結することなく、現地で聞き取りを継続する必要性があるため、チェルノブイリ事故以後も、スリーマイル島で中尾ハジメとアイルーン・スミスが聞き取り調査をつづけていた意義がその点にあることを主張した。

加えて、ふたりの仕事は、反原発ニューウェーブの火付け役となり、八〇年代に力を持った広瀬隆の原発「事故」が起きることで、生活が破壊される（滅亡する）という「終末論」的な煽りとは一線を画すものであることを指摘した。広瀬の仕事から欠落している「事故」以後は完結するものではなく、延々と継続するものであるという観点から、「事故」で全てが終わるのではなく、生活が「事故」以後に変貌し、それが完結することなくつづくという（滅亡よりも厳しいかもしれない）「現実」を生きなければならぬということ、先駆的に示した仕事と

して中尾ハジメとアイルーン・スミスのスリーマイル島での聞き取り調査を評価し、そのような仕事にも書く場所を与えていた『80年代』の多様性の一端を明らかにした。

◇座談会印象記

二〇二一年十二月二十五日、福岡大学とオンラインで開催された第六五回原爆文学研究会に参加した。第一期最後を締める座談会は、参加者それぞれの思いが明かされた密度の濃いものとなった。いつも最初に挙手をして質問してきた高野さんは、傍観者になるなという思いから、懸命にレジュメを読み、発表者に憑依して質問を捻り出してきたという。また、いつも発表で膨大な先行研究をマニアクに網羅してきた中野さんは、先人が積み上げてきたことを大切にしたいからこそその網羅であったという。研究会としての到達点については、少人数で始めた会が世界中に広がっていったことや、二〇一七年の『〈原爆〉を読む文化事典』の刊行が、それぞれ長野さん、畑中さんから言及された。会にはいまや様々な領域から原爆・核にアプローチする人々が集っているが、坂口さんは、最近の研究者の会になっっているのではないかと懸念を表明され、川口さんと長野さんは、今後の方向としてもう一度文学に立ち戻り、文学としてのアプローチを模索したいと語った。参加者の思いはそれぞれだが、表現者やジャーナリストなど、狭い意味での研究者に限らない人々の参加がこの会をより魅力的で刺激的なものにしていることは、複数の人が言及した共有認識であったと思われる。研究会をクリスマスマスに開催することや会誌編集の負担など、運営に関する意見も挙げられた。良くも悪くもアナログで人間味に溢れた会である。個人的な話を見ると、私がクリスマスに福岡に駆けつけたのは、第一期の最後を見届けたいという思いからであった。ちょうど十年前にはじめて参加して以来、

研究会（正確には会に集う人々）は私にとって大切な存在となつていった。二〇一七年には陝川に訪問して貴重な経験ができ、二〇一八年からの長崎での生活は、長崎で開催された研究会とともに幕を開けた。仕事に人生に大変だった時、メンバーが心の支えとなってくれた。研究会で出会えた方々は、人間が経験した核の惨禍を、人間の視点で捉え、表現しようとする、終わりのない営為を同時代に行っている仲間である。これまでの会を支えてこられた方々への感謝とともに、第二期となる会の今後を楽しみにしている。
(中尾麻伊香)

彙報

第六五回 原爆文学研究会

○日時 二〇二一年十二月二十五日（土）

○会場 福岡大学 文系センター棟十五階第五会議室

※ウェブ会議システムを利用したハイブリッド形式での開催

○ワークショップ…「一九八〇年代の雑誌にみる反原発思想」

報告1 一九八〇年代までの児童文学誌にみる「反原発」

言説の展開と、たつみや章『夜の神話』の登場

高畑 早希

報告2 『宝島』における反原発思想の展開

久野桜希子

報告3 運動体としての野草社

— 『80年代』・『自然生活』の分析を中心に—

加島 正浩

○座談会…「原爆文学研究会の二〇年を振り返る」

川口隆行 坂口博 高野吾朗 中野和典 長野秀樹 畑中佳恵

編集後記

二〇二一年十二月の第六五回研究会開催から会報発行に至るまでの間に日本では新型コロナウイルス第六波、世界ではロシア軍によるウクライナ侵攻と、私たちを囲む世界が大きく変わってしまう報道が連日続く事態となりました。人が自身の生活や生命を脅かす事態に直面し、新たな冷戦の到来とも思われる中、奇しくも本研究会は二〇二二年三月をもって第一期の活動を終了します。今後は第二期・原爆文学研究会（仮）の会員を募り、新たな活動体制を模索していく予定です。

最後になりましたが研究会での報告内容をお寄せいただいた報告者のみなさん、巻頭エッセイおよび座談会印象記の執筆を快諾してくださった長野秀樹さん、中尾麻伊香さんに心よりお礼を申し上げます。

(堀本 嘉子)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四・〇一八〇 福岡市城南区七隈八・一九・一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表)

URL <http://www.genbunken.net/>